金子さんの思い出

住田正一

金子さんは忙しい人に似合わず、よく手紙を書かれた人で、一寸した用件でも、使の者に持たせてよこされた。その一例だが、私にも、昭和十六、七年頃だが、こんなのが残っている。

拝啓　過般来色々とお世話様に相成り奉謝候　突然ながら昨今の木造船運用の計算は如何相成居り候や各社の分相分り候はば御取調べの上御聞かせ下され度願上候　草々

金子　直吉

住田正一様

金子さんは大概手紙に金子直吉と署名された。しかし急ぐ時にはただKの一字をしたためた。その関係からこのKをもじって、俳句など詠んだ時に「片水」という俳名を用いておられる。「片」という字はKは片方だけの水だと云うことである。

金子さんといえば昔から俳句が得意であった。この人の俳句にも、よくその性格が出ていて、その時の気持が適切に表現されている。

雷鳴（かみなり）の跡に涼しき青田かな。

これは鈴木商店を整理してからの感想を詠んだものである。

またこんなのがある。

天正の矢叫びを啼け時鳥

これは愛媛県新居浜市外の金子山古戦場を安東直市君等と共に、訪れた時の句である。金子山は金子さんの先祖金子備後守が主君長曽我部に殉じて、豊臣秀吉と戦って討死した所で、現在は市の公園の一部に取入れられている。右の句は金子さんの句の中でも、その時の感慨を詠んだもので、力がこもっている。最近関係有志が集まって金子山に句碑を建立したが、字は田宮嘉右衛門翁が染筆されたものである。

金子さんは俳句も作るが、また同時に間髪を入れず奇抜なユーモラスクをいう人であった。かつてある人が、お正月に金子さんの家へ行ってお餅を御馳走になった時に「あなたはお餅が好きですか」と訊ねたら金子さんは笑いながら「私は餅が好きだが、餅の中でもとり分け金持が好きです」と答えた。

金子さんの次男武蔵さんは現在東京大学文学部の部長で、ヘーゲル哲学を長く研究し、その著書『ヘーゲルの精神現象学』はかつて岩波書店から出版された。

その本が出来た時のことである。ふとそれを見た金子さんは、自分の息子の書いた哲学の本はどんなものであるのか読んでみようと思って、最初の何ページかに目を通してみた。事業のことならどんなことでも判らないことはなかったであろうがいくら金子さんでも哲学の本は全然判らない。けれども、困難に会えば、益々努力する金子さんのことである。数時間ものもいわず一生懸命考えながら熟読してみたが、どうしても意味が通じない。

恰もその時は真夏のことで、金子さんは涼しそうな樹蔭に椅子を出して読んでいたのであるが突然女中を呼んで、紙と硯を持って来させ

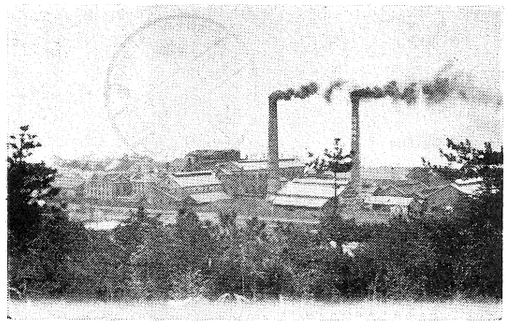
蟬啼くや、樹下の親爺、つんぼなり

と書かれた。耳の遠い金子さんにふさわしい句である。

その後暫くたってから、その本の前後のことを知らない私に「君にいい本をやるよ、君なら分るであろう」といって、その『ヘーゲルの精神現象学』をよこされた。そして「息子は哲学をやっているが私のテツガク（鉄学）とは大分勝手が違う。テツ（鉄）はテツでも、息子のテツ（哲）は判らない」といわれた。

金子さんの思い出話はまだいくらもある。機会をみてまた紹介したい。諸兄よ御自愛を……。

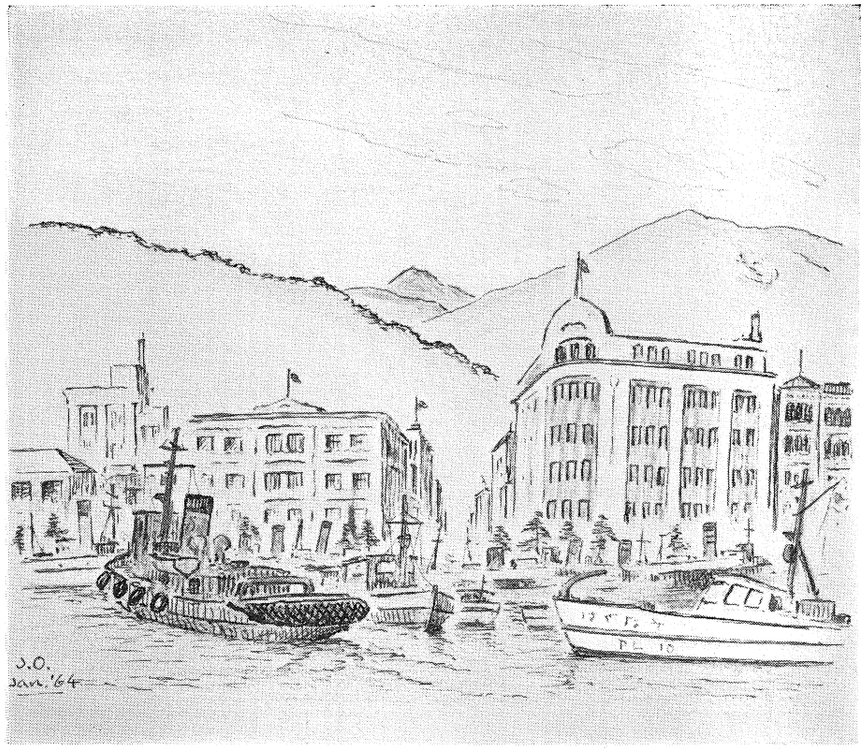
（呉造船所社長）



大里製糖所全景（明治40年）
京阪神特約販売店運動会記念P・R絵はがき

再度山が見える

メリケン波止場附近



えと文　小川実三郎

幹事会で、いよいよ会誌『たつみ』を発行することを決めた席上、幹事諸君から僕に何か画を描くよう要請があった。元来僕はいい景色や珍しい物を見ると有合せの紙片（持合せのはがきなど）に鉛筆やペンで絵日記式にこれを写生する子供のような趣味があるので、恰も僕が絵でも描けるように思われることがある。然し七十五才になる今日迄未だ曽て絵を習ったこともなければ、前記の絵日記的スケッチ以外絵らしいものも描いたこともない、況や読者層に多数の名士年配者を予想される「たつみ」創刊号に画を描くなんて僕には到底出来ない。困ったな―と思い乍ら数日前ふと、曽ての鈴木の本拠、海岸通拾番館（今は焼跡でまだ何も建っていない）から、先年辰巳会大会を開催したことのあるオリエンタル・ホテル、更に日商神戸支店のある海岸ビルと、海岸通を東から西へ歩いていたら、ビルの谷間から再度山の山頂が顔を見せてるのを発見した。再度山と云えば鈴木商店時代、芳川筍之助さん、松本三平さん其の他、店の人が多数毎朝登った山だが、会の名幹事十河君は今尚、日参登山して居ると、かねがねきいているので特に興深く此の景色を眺めた。僕の連想は更に飛躍し、この居留地界隈こそ日本貿易の揺籃期以来今日迄実に百年に亘り、初代鈴木岩治郎氏を始め、青年金子、柳田さん以下数千或は万を越えるスズキ・マンが足跡を印した土地だと思うと、カネタツ由縁の地でもある。そんな追想に耽り乍ら描いてみたのが此の絵で、辰巳会諸君にも多少興味を以て見て頂けるのではないかと、厚かましくも此の粗画を以て『たつみ』創刊号に対し祝意を表する次第です。

永年神戸に住み慣れてる人は今更大して気も付かないが、考えてみると神戸は気候温暖、風光明媚、海あり山あり、滝あり温泉あり、東には三千尺の六甲聳え西には名勝須磨明石を控え、銘酒の灘五郷、源平、楠氏の史蹟と枚挙に暇ない景勝の地で、これは他の土地に行ってみると始めてよく判る。麗しき哉カネタツ発祥の地、素晴しき哉鈴木発展の地、愉しき哉辰巳会本部の地、と僕は絵に添えて神戸礼讃の辞を付け加えたい。

（一九六四・一月某日誌）